

## 天声人語

児奈マーチ」という行進曲が評判を呼んだ。手児奈は万葉集にも詠まれた伝説の美女。自分をめぐって争う男たちを悲しみ、いまの千葉県市川市にあった入り江に身を投げたとされる▼作曲者はのちにウィーン音楽界で重きをなすルドルフ・ディットリヒ。明治の中葉、東京音楽学校（現東京芸大）で6年、音楽を教えた▼「安産や子育ての神様として手児奈を知ったのでしよう。日本女性との間に男児をもうけ、離日の際は残していく母子の行く末を案じていました」。推理するのは地元の市川市でディットリヒの顕彰を始めた桑村益夫さん（82）。ウィーンに埋もれていた楽譜を取り寄せ、2年前には所属する楽団で披露した。いまは評伝刊行の資金集めに奔走する▼いわゆるお雇い外国人の中で知名度こそ高くはないが、貢献度は高い。本場の作曲、指揮、歌唱、演奏を体系的に教え、鹿鳴館で音楽会を開いた。明治憲法の公布を祝う歌を作り、帝国議会開設の記念曲も奏でている▼授業は厳しかったが、返却する答案には「日土理非」と当て字の印を押した。遊び心もあつたらしい。帰国後は日本で集めた旋律をもとに曲作りに励んだ。「手児奈」も自ら指揮したという。リズムは全編ウィーン風ながら、民謡や小唄からとりいれた旋律が耳にすっとなじむ。万葉集から鹿鳴館へ、帝国議会からウイーンの音楽堂へ。目を閉じて時空を旅する感覺をしばし満喫した。

2017・10・20